

## 第 26 回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 『That's What Friends Are For』講評

今年の課題絵本『That's What Friends Are For』は、Goat と Pig の友情を描いた作品です。Goat は朝からうきうきして目覚めます。というのも、その日、大の仲良しの Pig に食事に招かれているから。ところが、ふと窓からお隣の家を見ると、Pig が泣いているではありませんか？ どうして？ Goat がいろいろ想像を巡らせるさまと、最後のオチがほほえましい一冊です。

タイトルにもなっている『That's What Friends Are For』が本文中でも最後の締めくり。ここに、訳者がどんなふうにこの物語を読んでいるかが現われて、とても興味深かったです。

一次審査ではまず、主に以下の点をチェックしました。

- ・読みやすい文章になっているか(ちゃんと日本語になっているか)
- ・絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか(対象年齢が意識されているか)
- ・原文にない勝手な補足(不必要な付け足し)がされていないか
- ・訳しもれはないか(「said ○○」の省略など、意図的な工夫は OK)
- ・誤った日本語が使用されていないか
- ・誤字脱字はないか
- ・訳文が絵に合っているか
- ・台詞の口調がその登場人物にあっているか。また、作品内で統一されているか(途中でキャラが変わっていないか)

もちろん、誤訳もチェックの対象です。意外に軽視されることがある英文法ですが、まず文が正確に理解できないことには、翻訳することはできません。日本語の表現力や、テーマや時代背景に関する知識や読み取り力は、そのあとの問題となります。また最終的にも、頼りになるのはやはり文法だと、翻訳の仕事をしているとつくづく思います。

例

・had invited 過去完了形に注意。dinner にいま誘われたのではなく、前もって誘われていたとわかる訳に。また、「(外食して)おごってくれる」と読める訳や、定期的に食事会をしていると読める訳にならないように。

・Goat was thinking(この後の展開も含め) ここから「think - mumble - whisper - shout」とだんだんヒートアップしている。作者が違う単語を使っている意味を考え、(基本的には)違う日本語表現に。

・count on me(まかせて)や、never fear(だいじょうぶ)、couldn't wait a minute longer(もうこれ以上待てない)といった熟語・慣用表現をまちがえない＝正しく辞書を引く

\*

今回は、文法やストーリー運びなどが比較的わかりやすい作品だったため、一次審査を通過した 29 作はどれも非常に完成度の高いものでした。そのため、二次審査は大変難しいものになりました。

最終的には、いかに物語を読みこんでいるか、そして、読みこんだことをいかに(子ども)読者に伝えることができるか、がポイントとなりました。

例えば、

Maybe one of the neighbors' boys trampled down Pig's favorite flowers, Goat was thinking.

では、favorite flowers を「おきにいりのはな」や「だいすきなはな」と訳してもまちがいではありません。しかし、【favorite “preferred to all others of the same kind”】という原意を最大限に生かし、「なにより ブウさんが だいじにしている おはな」(大賞の方の訳)と丁寧に訳出することで、Pig が涙を流すほど泣く(と Goat が勘違いする)のも当然であることや、そもそも親友の Pig が花壇をとて大切にしているのを Goat がちゃんと知っていることなどを、暗に伝えることができます。それによって、物語にふくらみが出ると思うのです。

Or maybe he forgot to turn off the faucet in his bathroom! Goat was still thinking.

の still thinking も意外に難しいところです。「ヤギさんはまだ(さらに)考えています」と still を直訳すると、どうも日本語としてしっくりこないからです。だからといって、still を無視して、ただ「と、ヤギさんは思いました」、「ヤギさんは考えます」などと訳すのでは物足りません。ここでも、作者がなぜ still という語を入れたのかをよく考え抜き、「やぎくん、かんがえだしたら とまりません」(優秀賞の方の訳)とすれば、「とまらない＝まだ考えてつづけている」という still のニュアンスをきちんと拾うことになると思います。【注：訳文が作者の意図を汲んでいるかどうかは、この一文の訳だけではなく、全体の訳を通して判断しています】

これは、

Will you help me cut more onions for my stew?

の more も同じです。略して訳す(シチューのたまねぎをきるのをてつだってくれない? など)方が多かった中、大賞の方はきちんと「……たまねぎを もうちよつと きらなきゃ」と訳されていました。この「もうちよつと」があることで、もうすでに玉ねぎを切っていた＝だから、涙が出ていた、ということがはっきりします。ストーリーのオチにも関わる重要なところです。

また、入賞している方々はみなさん、Oh no! や Oh, dear,などの感嘆詞も、上手に訳していらっしゃいました。つい「おや」とか「まあ」など、間違いではないけれど無難な訳になるところを(私自身もよく、そんなふう  
に訳してしまいます)、「や、や、や！」「はてさて」「まいったなあ」「あれっ！？」などなど、声に出して読む  
と楽しい訳が多かったです。Or のくりかえしも、「それとも」→「いやまてよ」→「ひょっとして」などと段階を追っ  
て訳し(特別賞の方)、物語を盛り上げている訳もありました。

毎回お話することですが、絵本は基本的に声に出して読み、耳で聴く文芸と言えます(もちろん、そうで  
ない絵本もたくさんありますが)。ですので、上記のようにリズムが良く、聞いていて楽しい訳にはとて  
も大切です。みなさんもぜひ、ご自分の訳を何度も音読してみてください。

以上、今回の審査結果が、本当に細かいところの違いによるものだったことがお分かりいただけたかと思  
います。入賞なさった方々の作品以外にも、すてきな訳、読んでいて楽しい訳がたくさんありました。みなさ  
んに賞を差しあげることができないのが、残念なくらいです。

最後に、作家のゴルバチョフさんの絵本は、日本でもいくつか翻訳が出ています(本作品は未訳です)。  
今回はコンクールという性質上、既訳との関連性はまったく考えずに審査したことを、念のためお伝えしてお  
きます。

繰り返しになりますが、今回も本当にすぐれた訳文がたくさんありました。私も(悩みに悩んだとはいえ)と  
ても楽しく審査することができました。どうぞ来年度もぜひコンクールに参加してみてください。お待ちしております。

英語部門 審査員 三辺 律子